

小・中・高連携による家庭科授業の実践

— 「リレー刺繍」の教材開発—

(家政教育講座) 竹下浩子、藤田昌子、(愛媛大学附属高等学校) 皆川勝子

(松山市立生石小学校) 中矢恵美香、(愛媛大学教育学部附属中学校) 大黒智子

Practice of home economics lesson in collaboration with elementary school,
junior high school and high school
- Development of teaching material "Relay Embroidery"-

Hiroko TAKESHITA, Atsuko FUJITA, Katsuko MINAKAWA,
Emika NAKAYA and Tomoko OGURO

(平成27年6月18日受理)

抄録：小学校、中学校、高等学校の連携による家庭科の授業として、各学校種で学ぶ家庭科の内容の連続性と系統性を重視したリレー刺繍の教材開発を行うとともに、各学校での実践を通して、その効果を検証した。その結果、リレー刺繍が、家庭科のものづくりとしての教材価値が高いだけでなく、共同製作を通して様々な人々とのつながりを実感させる教材であることが分かった。

キーワード：家庭科授業、小・中・高連携、教材開発、リレー刺繍、持続可能な社会

1. はじめに

生活者としてよりよく生きることを目標とする家庭科教育においては、児童・生徒に対して、生活者の視点からの価値判断や態度への継続的な働きかけが必要である。現行の学習指導要領の内容が小学校、中学校で統一されたことから分かるように、小学校、中学校、高等学校の家庭科の学習は、その前段階の学校での学習を基盤として発展させるものであり、小学校、中学校、高等学校で学ぶ内容の連続性と系統性を重視しながら指導することが大切である。しかし、実際に

は小学校、中学校、高等学校との連携は十分におこなわれていない。その理由として、小学校・中学校・高等学校のカリキュラムの系統的な整理がなされていないこと、小学校、中学校、高等学校の教員の交流がほとんどない中で、発達段階を見据えた連続性のある家庭科の授業デザインが難しいことがあげられる。

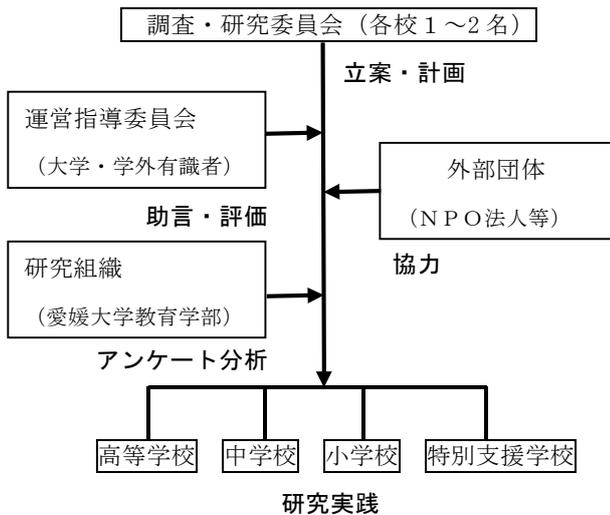
そこで、本研究では、小学校、中学校、高等学校の連携による家庭科の授業として、リレー刺繍の教材開発を行うとともに、各学校での実践を通して、その効果を検証する。

2. 調査方法

1) 連携組織

愛媛大学附属小学校、中学校、高等学校の附属学校園の家庭科教員は、これまでに様々な教育・研究活動を共同で行っている。特に、平成24年度から平成26年度まで文部科学省の委託による「消費者教育推進のための調査研究事業」の指定を受け、教育・研究に対する連携体制が整えられている。連携組織としては、教育・研究を連携して進めていくにあたり、定期的集まり、研究の計画を立てる「調査・研究委員会」、研究に対する助言や指導をおこなう「運営指導委員会」、協力や支援をおこなう「外部団体」、研究実践の検証を行う「研究組織」で構成され、附属小学校、中学校、高等学校の家庭科教員以外に特別支援学校の教員、愛媛大学教育学部と農学部の教員と学生、他大学の教員、NPO法人などが連携組織に加わっている。

消費者教育推進のための調査研究事業連携組織



2) リレー刺繍の概要

リレー刺繍は、愛媛大学附属高校が、平成25年度に「NPO法人えひめグローバルネットワーク」代表竹内よし子氏と連携協働して行った高等学校「生活総合Ⅱ」の授業から発展させた学習教材で、平成26年度に愛媛大学教育学部附属小学校と中学校、附属高校の家庭科で連携して学習プログラムとして作成したものである。

平成26年度の取り組みでは、各校種が交流を行っていく中で、共通の課題意識を持ったり、交流の見通しを持ったりすることをねらって、平成26年5月27日に

「NPO法人えひめグローバルネットワーク」の竹内よし子氏を講師に迎えて、講演会と児童・生徒の意見交流を行った。この合同授業には、小学校5・6年生約240名、中学校3年生約160名、高校1年生約120名、大学生（希望者）5名、合計約520名が集まった。



写真1 合同授業の様子

次に、リレー刺繍の製作では、「NPO法人えひめグローバルネットワーク」の協力を得て、モザンビークの女性が刺繍した布を日本に持ち帰ってもらった。その布に、小学生、中学生、高校生が順に刺繍をしていった。期間は、平成26年9月～10月末日であった。最後に、刺繍をした布を使ってウォールポケットに仕上げ、それぞれのポケットには、そのポケットに刺繍をした子どものメッセージカードが入っており、誰でも自由に見ることができるようにした。各学校の参加者の内訳は、以下のとおりである。

参加者	小学校：5年生	(119名)
	中学校：1・3年生	(約280名)
	高校：1年生	(128名)
	合計	約530名



写真2 刺繍をするモザンビークの女性



写真3 小学校のリレー刺繍の授業の様子

問題の存在に気付き、持続可能な社会を目指して自らの生活意識やライフスタイルを見直す。



写真4
中学校のウォールポケット製作授業の様子



写真5
高校のリレー刺繍の授業の様子

3. 結果および考察

1) カリキュラムの整理

小学校、中学校、高等学校の児童・生徒による共同製作体験として、リレー刺繍を各校種の家庭科の年間指導計画に盛り込み、家庭科の学習の目標に沿った活動にするため、家庭科の教科書(表1)やカリキュラムとの関連を明確にした。その結果、高等学校の家庭基礎では、「ライフスタイルと環境」、中学校の家庭科では、「生活を豊かにする物をつくる」、小学校の家庭科では、「針と糸を使おう」で行うことにした。

また、家庭科の学習指導に沿って消費と衣生活を関連させた授業を考えていく上で、各校におけるリレー刺繍のねらいを以下のように設定した。

小学校：なみ縫い、返し縫い等を使って自分の表したい物を表現することで手縫いに関する技能を高めたり、自分の生活と身近な環境や様々な人々の関わりに気付き、自分にできることを考えようとする態度を育てたりする。

中学校：手縫いやミシン縫いなどの基礎的・基本的な知識と技術を活用し、生活を豊かにする物を製作することを通して、持続可能な社会の構築を目指して、自分や家族の生活を見直す。

高校：1針刺繍することにより、誰かが作った作品から自分の作品として考えることを通して、多様化・グローバル化した経済発展に伴う様々な

表1 リレー刺繍と教科書との関連

教科	科目	題材	単元目標・内容	リレー刺繍	関連分野
小学校	わたしたちの家庭科 (開隆堂)	はじめてみようソーイング	① 針と糸にチャレンジ	●	
			② 楽しい小物づくり	●	
		わくわくミシン	① ミシンぬいにチャレンジ		●
			② 計画を立てて、つくってみよう		●
		じょうずに使おう物やお金	① 物やお金の使い方を見直そう		●
			② 買い物のかたを考えよう		●
		生活を楽しくしようソーイング	① つくりたい物を考え、計画しよう		●
			② くふうしてつこう		●
			③ 楽しく使おう		●
		考えようこれからの生活	① わたしたちの生活と環境		●
			② 感謝の気持ちを伝えよう		●
			③ 人びとや環境とのかかわり		●
中学校	家庭分野 (開隆堂)	布を用いた物の製作	① 製作の前に知っておこう	●	
			② 製作して、活用しよう	●	
		家庭生活と消費	生活に必要なものの流れ		●
			① 商品購入のプロセス		●
			② 生活情報の活用		
			③ 商品の価格		●
		商品の選択と購入	④ 販売方法と支払い方法		
			① 環境への影響を考える		●
		環境に配慮した生活	② エネルギー消費とCO2排出を減らす		
			③ 水を節約し、排水の汚れを減らす		
			④ 環境への影響を考えた消費生活		●
			⑤ 持続可能な社会へ向けて	●	●
生涯の経済計画	① 生活に必要な費用と管理			●	
高校	家庭基礎 (開隆堂)	消費者としての自立と社会参加	② 将来を見通した経済計画		
			① 社会の変化と消費者問題	●	
		ライフスタイルと環境	② 消費者の権利と責任		●
			① 消費生活と環境とのかかわり	●	●
ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動			② 持続可能な社会に向けて	●	●

2) リレー刺繍の作品

児童・生徒の作品から、リレー刺繍が一枚の布を通しての間接的な交流でも、子どもたちの思いをしっかりとつなげることができることがわかった。

このことから、リレー刺繍は、刺繍やウォールポケットの製作など家庭科のものづくりとしての教材価値が高く、発達段階に応じて行うことができることが分かった。さらに、製作を通して、製作者同士のつながりや、実際に顔を合わさない人同士のつながりまで感じることができる教材として有効であるといえる。

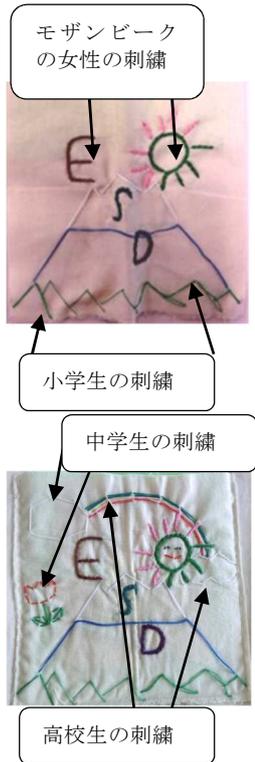
3) 児童・生徒の感想

① リレー刺繍について

リレー刺繍がウォールポケットとして完成した11月以降に、小学校、中学校、高等学校のそれぞれで完成作品を鑑賞し、感想を書かせた。また、高校ではアンケート調査も併せて実施した。

児童・生徒の作品例

太陽があったので山をぬいました。この山がみんなの力と太陽の力でもっと大きくなるようにしたいという願いをこめました。
小学生(1) ↓
太陽があって、その下に小さな山があったので、富士山をかきました。大きくりっぱにしたいという願いをこめました。
小学生(2) ↓
富士山ができていたので、雲をぬいました。一つしかぬうことができなかったなので、次の人、お願いします。
中学生 ↓
雲をぬいました。また、モザンビークと日本をつなぐ架け橋になってほしいという思いをこめて、二つの雲の間に虹をかけました。
高校生



感想を分析すると、「ウォールポケット」、「モザンビークの人」、「つながり」、「世界」、「協力」、「希望」、「広がり」、「感謝」、「色々なアイデア」、「他の人の感想」、「平和」、「心のリレー」、「達成感」などがキーワードとして挙げられた。

高校生にリレー刺繍をしている時に考えたことをアンケートで聞いたところ、「自分以外の人が出した刺繍の意味」(80人)、「発展途上国の人々の暮らし」(67人)が圧倒的に多かった。また、リレー刺繍をして良かったかという質問に対しては、「良かった」が100人、「どちらでもない」が22人で、「良くなかった」と答えた生徒はいなかった。良かった理由としては、「刺繍が楽しかった」(56人)、「刺繍で人の役に立てたから」(44人)、「どんな作品になるか楽しみだから」(41人)の順で多かった。

リレー刺繍で、次の人が縫った後の布を見て、子どもたちは、自分の気持ちを受け取ってもらえたことに感動したり、他の人の刺繍に込められた気持ちを受け取り、新たな考えを持ったりしていた。また、この作品をモザンビークの人に見てもらいたいという子どもが多かつ

た。みんなが幸せに暮らせることを願う気持ちが育ってきていた。

授業を終えての児童・生徒の感想

○ 私がししゅうをしたあと、だれがどんなししゅうをするのか、とても気になっていました。とてもすてきなウォールポケットになっていたのでうれしかったです。モザンビークの方にも見てもらいたいと思いました。(小学生)
○ みんな名前も顔も知らない人。だけど、そんな人たちのチームワークでこのししゅうはできたのだと思いました。(小学生)
○ 1、2年の時は感じませんでしたが、「人と生きていく・生きていっている」というのを家庭科で身にしみて実感しています。具体的には、多くの人々との関わりによって私たちは生かされているということです。家庭科は、衣食住をメインに学習を進めていくと思っていたけれど、根本的に「人との関わり合い」を学ばせていただく教科なのかなと思います。そして、それは、これから生きていく上で忘れてはいけない重要なことなのだと思います。(中学生)
○ 講演会からはじまり、私たちも参加してウォールポケットを作ったりして、遠い外国から今自分の手元に見える形のつながりがあるので、持続可能な社会について真剣に考えることができたし、身近に感じました。教科書の文字で問題を書かれても分かりにくけれど、こういった活動をすれば、とても分かりやすいなと思いました。(中学生)
○ 自分が刺繍に込めた平和への願いや思いが、こんな風に受け継がれ、1つの形となっていることに感動しました。(高校生)

表2 リレー刺繍の時に考えたこと(高校生)

1. 自分以外の人が出した刺繍の意味	80人
2. 発展途上国の人々の暮らし	67人
3. 地球温暖化	23人
4. 森林破壊	17人
5. NPO法人	17人
6. 環境汚染	14人

表3 リレー刺繍をして良かった理由(高校生)

1. 刺繍が楽しかった	56人
2. 刺繍で人の役に立てたから	44人
3. どんな作品になるか楽しみだから	41人
4. グループで話げできた	25人
5. 刺繍や針仕事が好きだから	15人
6. その他	3人

②連携を活かした家庭科の授業について

小・中・高が連携したリレー刺繍では、児童・生徒自身が他校種の児童・生徒とのつながりを意識することにより、人とともに生きているという実感を持つことができ、家庭科のより深い学びにつながっていた。上級生にとって下級生は「自分が通って来た道」を意識させる存在であり、下級生にとって上級生は「これから通る道」を意識させる存在である。リレー刺繍に参加した児童・生徒は、完成作品とそれに対するメッセージを読んで、多様な人々との関わりに気付き、現在の自分を強く意識

し、将来への学びへつなげていこうとする姿勢がみられた。

小・中・高との連携について（中学生）

○小学生からのメッセージに、「虹の続きをお願いします」と書いてありました。他人だったその子がやっている虹を私が完成させたことで、今まで知らなかった子と一つのことを作り上げることに、共に取り組む意味をとっても感じました。刺繍でも、モザンビークの人だけでなく、高校生、小学生といった異年齢のみなさんと関わったこと、一つのことを成し遂げたことにとっても幸せを感じ、一つになったように感じました。顔も見たことない人とリレー刺繍をしたことで、なんか「和」というものができたと思いました。人と共に活動し、学ぶことの楽しさに気付いた学習でした。

○色々な年齢の人と関わって、自分と比べることで、自分の気持ちや考え、役割に気付くことができた。また、想像力が豊かになったように思う。日本のように物があふれている場所があれば、外国には水も食料も満足に手に入らない場所もある。世界で生きるということは、見えない場所にいる人とも助け合い生きていくことだと思った。

○小学生や高校生、中学生「だからこそ」の考えを共有できたことがよかったです。今の自分では思い付かない素直な疑問や、少し大人な考えを知ることができて、中学生である「今だからこそ」の考えの大切さに気付くことができました。

○それぞれにそれぞれの意見があり、みんなが当事者だ。みんなの意見を聴き、受け止めた時、初めてみんなの家庭科になる。ぴしっと手を挙げて発表していた小学生も、落ち着き丁寧に発表した高校生も、みんながいる。そして、みんなで学ぶことで、家庭科は輝くのだと僕は思う。

○違う年齢の人と活動することで、様々な人生経験や視点を知ることができた。同じ学年だけより、考えや視点など多数のものが出来た。今回の活動が、今まで考えていなかった、外国や国際社会への共生を考えるきっかけになった。

4. まとめ

身近に多くのものが溢れ、店に行くとも何でも手に入る現代において、児童・生徒の生活にかかわる経験や関心はどんどん薄くなっている。その背景に、生活者として一人一人の消費行動が、世界の環境や文化に影響を及ぼすことを児童・生徒の実生活の場面のみで理解させることが難しいという点がある。家庭科教育では、自分の生活と社会（身の回りの人や物など）との関係に関心を持ち、自分の行動がどのような意味を持っているのかを理解し、自分の行動を変えることでより良い世界や未来を作るという主体的な考えを持つ児童・生徒を育てるために、児童・生徒が生活に関わる様々な体験を行う場や様々な人と交流・協働する場を保障することが重要となる。

しかし、体験実習には全員が参加できる時間と場所の確保が難しい場合も多く、本調査研究で行なった「リレー刺繍」のような、各学校での家庭科の授業を中核とした間接的な交流によって「つながり」を意識できる消費者教育プログラムの開発が必要である。

リレー刺繍は、刺繍やウォールポケットの製作など、家庭科のものづくりとしての教材価値が高く、発達段階に応じた指導を行うことができる。また、製作を通して、製作者どうしのつながりや、見えない人とのつながりを感じることができる教材として有効である。さらに、共同製作を通して様々な人とのつながりを実感させるとともに、出来上がった作品を各校で展示することで、多くの人々に思いを伝え、共に支え合って生きていこうとする態度を育てることができる。

本調査は、学校間の連携が取りやすく、日頃から教員同士の交流がある附属学校園での実践であった。しかし、リレー刺繍は、合同で集まって作業をすることなく「つながり」を感じる間接的な交流活動の学習プログラムであるため、今後は様々な地域の小学校、中学校、高等学校、さらには短期大学・大学などの児童・生徒・学生が参加して行うリレー刺繍の教材を普及させたい。

5. 参考文献

- 愛媛大学附属高等学校、「平成 24 年度消費者教育推進のための調査研究事業報告書」、愛媛大学附属高等学校、平成 25 年 3 月
- 愛媛大学附属高等学校、「平成 25 年度消費者教育推進のための調査研究事業報告書」、愛媛大学附属高等学校、平成 26 年 2 月
- 愛媛大学附属高等学校、愛媛大学教育学部附属小学校、附属中学校、附属特別支援学校、愛媛大学教育学部家政教育「平成 26 年度消費者教育推進のための調査研究事業報告書」、愛媛大学附属高等学校、平成 27 年 3 月
- 櫻井純子ほか、「わたしたちの家庭科 小学校 5・6」、開隆堂、平成 25 年 2 月
- 鶴田敦子ほか、「技術・家庭 家庭分野」、開隆堂、平成 25 年 2 月
- 大竹美登利ほか、「家庭基礎 明日の生活を築く」、開隆堂、平成 25 年 3 月